

景気と天気サイクル

信州の冬の風物詩のひとつに諏訪湖の「神み」渡り』がある。諏訪神社に代々伝わる、このお神渡りの記録と、はるか一万キロも離れている南米ペルの雨の多寡とエルニニョ現象を通して結び付昂けている研究が知られている。

エルニニョ現象が起きるとペル沖で海水温が上がりペルでは例年より数倍もの雨が降る。一方、日本の冬は暖冬傾向となり、冷え込みが弱く御神渡りが遅れる。雨とお神渡りの遅れを数百年の記録で照らし合わせて、地球規模の大気の流れの異変の結び付きの証を見せてくれる。

エルニニョ現象は四、五年ほどの周期でリズミカルに発生しており、八七・八八年に続いて再び四年ぶりに発生し今まさに最盛期を迎えている。

先週末の経済報道で『主要企業の業績判断指数、四年ぶり悪化』という日銀発表のヘッドラインが紙面に踊っていたが、この指数の推移グラフが四、五年周期で見事に波打っ

ているのがエルニニョの進行と二重重ねで興味深く映った。景気不景気を繰り返す景気循環にもおよそ4年の周期があり、エルニニョサイクルとよく合っている。過去の統計によればエルニニョの一年数か月遅れで日本の景気のピークを迎える。さらに天気起源の景気の周期に太陽の黒点数のおよそ11年周期の変動がある。

周期カーブの底にあたる一九七五年や八六年が不況、極大にあたる七九年や平成元年の八九年が好景気の典型となっている。八八年からの平成景気は前回のエルニニョ後と黒点数の極大期とのダブル効果とで好景気の持続となったと考えられる。

このところの景気は後退気味だが自然の周期性からはエルニニョの一年半先の九三年のピークに向かって持ち直す傾向となるはずだが、バブルの崩壊とピナツボ火山の大噴火の影響でこのリズムが狂って来ているのかもしれない。 気象庁 村松 男)